

1 今年（H27）の傾向

総評・講評（大問毎に）

【総評】

長文読解2題、和文英訳1題の昨年同様の大問構成であった。

設問数は大問Ⅰが4、大問Ⅱは5、大問Ⅲは2。全て記述問題であり、和訳問題4、下線部説明問題が5、和文英訳が2という内訳であった。昨年見られた選択問題はなくなった。文章量、難度は昨年と同程度である。

和訳問題4つのうちの2つが、いわゆる長い英文を和訳するもので、英語としての理解と同時に、それを自然な日本語になおすために日本語力が求められる問題だった。そういう点でいかにも東北大らしい問題だったと言える。

【個別分析設問Ⅰ】

物質的豊かさと、幸福度の関係についての文章を読解する問題。出典は Daniel M. Haybron の Happiness。和訳2題、下線部の具体的内容を日本語で記述する問題2題。文章量、難度は標準的。関連テーマについて書かれた文章を読んだ受験生も多くいたであろうから、トピックとしては取り組みやすいものだったのではないだろうか。

問1は下線部和訳問題。so...that～構文（「とても…なので～だ」）の倒置した構造。those without～は「～を持たない人々」だが、those (who are) without～と考えれば理解しやすい。must は断定の助動詞で、「～に違いない」と訳される。なお、easily は助動詞と組み合わせられて推量/可能性を強調する用法。よって今回は訳出しないほうが自然でわかりやすい日本語になる。

問2は下線部 this の中身を具体的に説明する問題。下線部が含まれる部分を直訳すると「これはあまりに早まった結論だ」。該当箇所はこの直前の一文、～take the results to show that～の部分を訳すことになる。conclusion を「結論づけること」として捉え、「この結果を、～を示すものとして受け止めること」とするのが解答の大枠となる。

問3は下線部和訳問題。英語では3行にわたる長い1文である。日本語でも1文で書くことができるが、如かるべき箇所、すなわち tribe で一度区切ったほうが解答上は楽だろ

う。in some detail は挿入句。ここを飛ばすと told me…his experience…という tell AB という第 4 文型がはっきりする。関係節の後半は whom を regards の後ろに戻すと、regard A as B の構文であることがわかる。

問 4 は下線部 this question の具体的内容を説明する問題。この段落 4 行目の can に注目。これを「可能性」の can、すなわち「～の可能性はある」と捉えると、「問題」として記述されている内容であることがわかる。したがってこの段落 3～6 行目の内容 (Perhaps…life.) をまとめる。go to some lengths to do 「わざわざ do する」。go と take が並列で共に助動詞 can に続く本動詞。冒頭の this nonsense の内容も、この前の文から復元して解答したい。

#### 【個別分析設問Ⅱ】

和訳問題と記述式の説明問題から成る標準的なスタイルの長文読解問題。長文の趣旨は記憶の構造とそれに関わる脳科学の展開についての概説である。下線部説明問題（問 1、問 3、問 4）はいずれも代名詞や簡潔な表現を用いて抽象的に述べられている下線部を本文に即して具体的に説明する問題である。また、和訳問題（問 2、問 5）はどちらも構文把握は難しくないものの、意味の通る自然な日本語として訳出するには苦勞すると思われる。全体的に、英文として読み進め趣旨を理解するところまではできても、解答作成に当たっては相応の工夫を必要とする、やや取り組みづらい問題である。

問 1 は下線部説明問題。下線部 (A) を直訳すれば「記憶を作り思い出すことは 3 つの部分から成る過程である」となる。この「3 つの部分」を本文に即して具体的に説明すればよい。下線部 (A) の直後から ‘…first…’ ‘Secondly…’ ‘Then thirdly, …’ と列挙されているので該当箇所は明白だ。しかし、全文をそのまま訳したのでは解答欄に収まらない。この過程がどのようなものかがわかる範囲で本文の情報を適宜取捨選択する必要がある。それぞれの部分の核になる要素は「記録 (record)」「記憶への伝達 (be passed into…memory)」「記憶の取り戻し (recover)」である。それぞれの要素を冗長にならない程度にまとめる。

問 2 は和訳問題。一文が長く、日本語として自然なものに訳すのが難しい。押さえるべきポイントは 3 点。①主節は「that が why…を説明してくれるだろう」となっており、主

語 that が指しているのは前文である。後述する as 以降の内容と合うように、記憶が感情や経験に影響される点を簡潔に訳に入れる必要がある。why 節は ‘the same events’ まで。②ここでの as は「理由」を表す接続詞。‘such…as…’ で考えたくなるかもしれないが、その場合の as の後には such が修飾する名詞と同種の名詞（句）が並ぶか、あるいは as を疑似関係代名詞として用いる。ところが、この文の as 以降には通常の節が続き、不完全文でもない。そして、内容を見ると、なぜ記憶が感情や経験に影響されることが兄弟姉妹の記憶の違いを説明できるのかを述べているので「理由」を表す接続詞だとわかる。③文末の which は非制限用法（継続用法）。動詞 come の形から which の先行詞は複数形だとわかるが、直前の ‘electrical and chemical brain changes’ のみを指すと考えるのは早計である。(i) まず、‘as well as’ が用いられていることから ‘brain changes’ よりも ‘their own emotional perception’ に強調が置かれている。(ii) 次に、記憶が形成されるたびに働くのが、同じ生物学的構造を有していれば同じように働くであろう ‘brain changes’ のみだとすると、兄弟姉妹で記憶が異なることの説明にならない。文意からすれば「各自自身の感情的な知覚」もまた働くからこそ、記憶に違いが生じると言わねばならない。(iii) それゆえ、which の先行詞は ‘their own emotional perception’ と ‘electrical chemical brain changes’ の両方である。ちなみに、この両者はいずれも ‘products of’ の of の目的語になる点も見逃さないようにしたい。

問 3 は下線部説明問題である。下線部 (C) の it が指す内容は前段落にあるのだが、該当箇所を探すヒントはこの段落の第 3 文である。そこでは ‘it will be possible to develop multiprocessors that are as complex as the human brain’ 「人間の脳と同じくらい複雑なマルチプロセッサを開発することは可能になるだろう」と述べられており、これが段落冒頭の ‘how possible is it?’ に対する答えになっている。それゆえ、‘as…as the human brain’ をヒントにして前段落の第 1 文末尾 ‘like the human brain’ と最終文 ‘like a brain’ に注目する。前者については「人間の脳とまったく同じように働く大型コンピュータの開発」が述べられ、後続の文でこれを開発する目的が提示されている。そして、この「大型コンピュータの開発」に相応するのが最終文の ‘to create a machine…like a brain’ である。したがって、この 2 箇所を併せて解答を作成する。

問 4 は下線部説明問題である。下線部 (D) は “That’s the ultimate goal” となって

いるので、まず That が指す内容を特定する。その際、下線部(D)の補語 ‘the ultimate goal’ に注目すると、これは前文の ‘what might be more challenge is…’ 「より困難であるように思われるのは～だ」を承けた表現だということが読み取れる。それゆえ、That が指すのは ‘to give it self-awareness’ である。さて、この中の it が指しているものは明確にしておく必要がある。 ‘what might…’ の主節と対比されている While 節に目を向けると、 ‘a neuron’ が登場し、 ‘to place it’ ‘so it could…’ と既に it で置き換えられている。この流れからここでの it も ‘a neuron’ と考えられる。問題は、このニューロンは人間の脳に元からあるものではなく、巨大コンピュータを使って人工的に作製された「機械」であるという点だ。このことを解答の中で明記しないと、なぜ「目標」とされているのかがわからないので注意しておきたい。また、 ‘to give it self-awareness’ という抽象的な表現は直前の文の ‘that can rearrange itself, that can re-make the connections’ で具体的に述べられている。この connections が第1段落で述べられているような記憶に関わる情報経路であることを踏まえて、 ‘self-awareness’ の含意がわかりやすくなるように説明文を作る。

問5 は和訳問題である。主節の構文は ‘she could recall…but not derive…’ と、接続詞 but を挟んで動詞が2つ並んだ形になっている。like は「～のような」を意味する前置詞で、like the relationship…, or the meaning…と2つの名詞を目的語にとっている。前置詞句 like…が修飾しているのは ‘not derive meaning from anything’ であることを踏まえると、the relationship と the meaning はそのままの名詞として訳すよりも、動詞的に訳す方がわかりやすい。

### 【個別分析設問Ⅲ】

出典は、村上春樹の『やがて哀しき外国語』。昨年・一昨年は部分訳3問の形式だったが、今年は2問に減った。直訳では英語に訳しづらい箇所があるので、伝えたい内容を汲み取って訳す必要がある。例えば(A)の「～けれど」は逆接ではなく、(B)の「～けれど」は逆接であるという点を読み取ってから英語に直す。

(A): 「～すればするほど、…」は、The 比較級 SV~, the 比較級 SV …を用いるが、別解のように it makes me more and more nervous as I speak のように工夫することもできる。この make の用法は今年度前期<sup>4</sup>(B)の「人間を少しも幸せにしない」を書く場合と同じ用法である。また、「～でもそれは同じである」は、今年度前期<sup>1</sup>問 1 の下線部和訳で出題された The same is true を用いて書くことができる。無理に一文で書こうとせずに、文を二つか三つに区切ってほうが書きやすい。

(B): 「必要以上に恥ずかしがる」は文字どおりには、be needlessly embarrassed だが、too ~ to do 構文を用いて近い意味を表わすことができる。なお shy を使うと、「～するのをためらう、おっくうな」の意味になる。「僕はそういう恥ずかしさというのはあまり感じない」の部分は、「あまり気にしない」、「それは私には当てはまらない」などと言い換えて訳すこともできる。

2 合否ライン（予想）※他の教科が合格ラインをとったときの得点（％）予想

【文系】

経済学部	65%
------	-----

【理系】

保健／看護	65%		
〃 検査	65%		
〃 放射線	65%		

3 来年受験する生徒へのアドバイス

毎年、英語らしい英語を日本語で記述する(和訳・説明)問題、及び日本語らしい日本語を英語に訳す問題が出題されている。大問構成、出題形式が多少違うとは言え、前期入試も含めた東北大の過去問をじっくり研究することが一番である。特に長めの英文を日本語にするトレーニングは、早い時期から取り組んでおきたい。英語として構文や大意がわかっても、自然な日本語にするのが困難な英文を攻略するには、英語に関する知識は当然として、様々な日本語表現にも習熟しておく必要があるからである。また、後期の入試としては未だ出題されたことはないが、長めの英文(要約・意見)を記述する問題もいつ出題されてもおかしくない。これについてもトレーニングを積んでおいて損はなかろう。読解、英作文等、多面にわたる応用力を磨くことができるからである。